



TITLE:

メランコリーのゆくえーフロイト
の欲動論からクラインの対象関係
論へー(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

藤井, あゆみ

CITATION:

藤井, あゆみ. メランコリーのゆくえーフロイトの欲動論からクラインの対象関係論へー. 京都大学, 2017, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-07-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20637>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	藤井あゆみ
論文題目	メランコリーのゆくえーフロイトの欲動論からクラインの対象関係論へー		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、ジークムント・フロイト、カール・アーブラハム、シャーンドル・ラドー、メラニー・クラインという4人の精神分析家のメランコリー（うつ病）論を検討することによって、これまで「欲動論から対象関係論へ」と整理されてきた精神分析史の研究をより詳細なものとし、さらにはアーブラハムのメランコリー論からクラインのポジション論への移行において芸術論が果たした役割を明確化しようとするものである。</p> <p>序論では、「良心」のように、〈私〉を監視し、批判してくる審級が〈内なる他者〉と名付けられ、メランコリーにおいては〈内なる他者〉の攻撃性が過剰になるとされるという精神分析の基本的考えが紹介される。そして、メランコリーをめぐる概念史が古代ギリシア（ヒポクラテス）から現代（『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』）まで通覧され、その中に改めてフロイトのメランコリー論が位置づけられる。</p> <p>第一章では、メランコリーにおいて重要な問題となる「対象」の概念について、フロイト、アーブラハム、ラドー、クラインのそれぞれの理論が詳細に論じられる。フロイトは、メランコリーでは「断念された対象に自我が同一化する」と述べ、この「対象」という用語がアーブラハムとラドーによって概念として錬成され、クラインの「内的対象」という概念に至ったことが説明される。また、その論述の過程で、〈内なる他者〉がフロイトにおける父性的な超自我から乳房を核とする母性的な超自我へと移行したことが明らかにされている。</p> <p>第二章では、メランコリーでは〈内なる他者〉である超自我が自我に対して容赦ない攻撃を向ける理由がフロイトの「死の欲動」概念をてがかりに考察される。フロイトにおいては、超自我の厳格さは原父殺害（子どもが父親にかつて向けていた敵意）に由来し、その敵意が自我に向けられた結果として罪責感が発生するとされていたが、アーブラハムは罪責感の原因を「口唇サディズム」に位置づけ、その攻撃性が向けられる相手も父親ではなく母親であることを示唆した。さらにラドーは、アーブラハムの「見捨てられ感」と「ナルシシズムの傷つき」に注目し、罪責感から由来する自己懲罰が、両親（超自我）からの愛と赦しを期待するものであることを示した。この考えは、クラインによって批判的に検討され、母親の乳房に対する幼児の「羨望」が母親殺害という無意識的空想を生み出し、そこから罪責感が発生するとした。第一章ではフロイトからクラインに至る理論変遷のなかで超自我の概念が父性的なものから母性的なものへと移行していることが示されたが、この第二章では同様に罪責感の原因が父性的なものから母性的なものへと移行していることが示された。</p> <p>第三章で論じられるのは、メランコリーないし攻撃性からの回復の道である。まず、フロイトの「昇華」論と「フモール」論が参照され、超自我からの攻撃による苦しみを慰める方途が示された後に、アーブラハムによる画家ジョヴァンニ・セガンティーニ論が取り上げられる。メランコリーの傾向をもっていたセガンティーニは、「良い母」を描く作品と、「悪い母」を描く作品を創作していたが、ここに「良い母親」と「悪い母</p>			

親」の分裂を見出す。そして、後のクラインによる対象関係論の起源がこのアーブラハムのセガンティーニ論にあるという重大な指摘がなされる。また、アーブラハムとフロイトの往復書簡や、ラドーの論から、この時代のメランコリー論が「神経症」と「精神病」のあいだの相互移行や中間領域の存在を示唆するものであったことが示される。さらに、クラインの「昇華」理論が詳細に検討され、「修復・償い」の作業によってなされる昇華がメランコリーからの回復となりうることが示された。ここでもやはり、クラインによる画家ルース・クヤール論が導きの糸とされており、総じて、精神分析におけるメランコリー論が創造性論と関係していることが明らかにされている。また、昇華論のなかでも、フロイトにおける厳格な父性的な超自我から、「赦す」母的な超自我への移行が生じていることが示されている。

結論では、序論から第三章までの議論が総括され、フロイトからクラインにいたる欲動論から対象関係論への移行が、対象、超自我、昇華という3つの概念のもとで整理され、父性から母性への移行という明確な見取り図のもとに整理されている。

補論では、日本精神分析の父とも呼ばれる古澤平作をフロイトに紹介した丸井清泰のメランコリー論が検討され、丸井は日本でラドー的な臨床例や「取り込み」の理論を発表した人物として位置づけられている。

(論文審査の結果の要旨)

精神分析の成立と展開を総括する学説史研究ないし「比較精神分析」的研究において、ジークムント・フロイトによる精神分析の発明からメラニー・クラインによる対象関係論の成立に至る過程にはこれまでも大きな注目が集まってきた。その嚆矢となったのはグリーンバーグとミッチェルの『精神分析理論の展開—欲動から関係へ』(原著1983年)であるが、本論文はそれらの研究ではあまり注目されてこなかった、クライン以前の分析家の理論に注目することによって、対象関係論の成立をより緻密に明らかにすることを試みた論文である。

論文全体は、〈内なる他者〉である超自我が自我を容赦なく攻撃する病であると考えられるメランコリーを題材に、フロイト、カール・アブラハム、シャンドル・ラドー、クラインへと至る「対象」、「超自我」、「昇華」という3つの重要な概念の理論的変遷が精査される形で進行している。そのなかで、これまで「欲動論から対象関係論へ」と簡潔に整理されてきた精神分析の学説史がそれぞれの概念について詳細に検討され、対象関係論の成立をいきいきと把握することを可能にしている。また、アブラハムのメランコリー論からクラインのポジション論への移行において芸術論が果たした役割も明確化されている。

本論文の最大の功績は、フロイトからクラインへと至る理論的変遷のなかで、〈内なる他者〉はフロイトにおける父性的な超自我から乳房を核とする母性的な超自我へと移行し、それとともに罪責感の原因も父性的なものから母性的なものへと移され、昇華論のなかでも、フロイトにおける厳格な父性的な超自我から、「赦す」母的な超自我への移行が生じていることが示されたことである。この明快な構図は、本論文で主題的に扱われる概念すべてに関して、フロイト、アブラハム、ラドー、クラインという4者の学説史が描けるという点で、特に評価すべき優れたものである。

ただし、本論文はクラインの対象関係論の成立までしか扱っていないためか、フロイトからクラインに至る系譜のなかで失われてしまったものや、変質してしまった概念については十分に検討されているとはいえない。また、臨床的な有用性も射程外である。しかし、本論文が学説史研究の立場から対象関係論の成立をより緻密に明らかにすることをその本質としていることを考えるならば、その問題の欠落は、本論文を評価するに当っては、さほど大きな欠陥とはいえない。

また、本論文で指摘された、精神分析におけるメランコリー論の発展がアブラハムによる画家ジョヴァンニ・セガンティーニ論や、クラインによる画家ルース・クヤール論といった創造性論と大いに関係しているという論点は卓見であるといえてよい。

このように本論文は、精神分析の成立と展開を総括する学説史研究として十分な厳密性と独創性をもった、卓越した論文となりえている。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年5月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降